

（仮称）標茶町博物館の 改修工事が終わりました！

昨年6月から始まった旧食材供給施設ピルカトウロの、博物館への改修工事が終了しました。現在館内には展示台や展示ケースが設置され、これから本格的な館内展示の整備が始まります。今月中には大判の解説パネルと、さまざまな鳥たちのはく製が展示された大きなジオラマが完成する予定です。

その後展示資料が搬入され、新規製作を含む展示模型なども設置されます。博物館は、旧食材供給施設ピルカトウロ時代の、おしゃれな建物の特色を生かしたレイアウトで改修されています。良い意味で博物館らしくない素敵な空間を楽しみながら、標茶の歴史や自然などが学べる新しい展示施設。7月1日のオープンまでどうぞ楽しみにお待ちください。



新しい展示室の様子



ピルカトウロ時代の面影を残す2階廊下



大川のほとり

—郷土館だより(第77号)—
☎487-2332

郷土館より
一筆啓上

雪のない冬が続くと思いきや、やはりまとまった雪が標茶に降りました。しかしこの雪が春先に溶け出し、小川を育み、様々な生き物の命を紡いでいくのでしょうか。除雪は大変ですが、大切な雪です。(坪)

くまのこころ

標茶・近世近代人物誌 第二話

標茶で最も古い人の痕跡は、約8千年前の縄文早期までさかのぼる事ができます。この地では多くの人々が生まれ、暮らし、そして亡くなっていきました。それは同時に集落を生み、町へと発展を遂げ、この地の歴史を紡ぎました。

標茶に生きた多くの人々の中には、伝記のような形で記録が残されている方もいます。標茶と関わりを持った人生の物語を、文献をもとにご紹介します。

北海道集治監釧路分監 書記

兼平 友太郎

(生年：元治元年(1864年) 没年：明治30年(1897年))

標茶の先人が多く眠る標茶霊園内には、明治32年に北海道集治監釧路分監が建立した合葬者之墓があります。そこより少し離れた場所にもう1基、集治監時代に建立された古い墓碑があります。北海道集治監釧路分監の書記として活躍し、明治30年12月30日に亡くなった、兼平友太郎の墓碑です。この墓碑は標茶在住の方のご厚意により、手入れがされています。しかし兼平自身については、昭和15年に釧路慈徳会(現在の更生保護施設)主催で行われた『舊釧路集治監死亡者追悼會』の後に行われた『釧路集治監を偲ぶ座談会』にて、

追悼會でお墓を詣でた兼平さんは青森県弘前の人で、非常な手腕家だったという。あの人が書類を作れば、どこに提出しても手直しする必要がなく、惜しい人物だったので、役所の方がわざわざ石碑を建てた。

と古老の田中又八氏が語っているのみで、それ以外の経歴については不明でした。その後、兼平について釧路集治監の研究者であった故三栖達夫氏が、昭和63年に、出身地である青森県弘前市や岩木市(現いわき市)に赴き、博物館や郷土史家の方々から情報を集めるなど、詳細が調査されました。三栖氏による兼平友太郎履歴の調査結果は、

標茶町郷土館 職員だより
ジオラマ模型の補修中です



博物館の開館に向けて、いろいろな仕事をしています。

引越し作業や新規展示の作成もその一つで、郷土館で展示されていたジオラマ模型も、リニューアルする予定です。

現在作業を行っているのは、縄文時代の墓跡の再現模型の補修です。掃除してから、元々は黄色の砂を使って各種の色に染め上げ、土台に作成した色砂を載せていき、発掘された状況を再現していきます。完成した模型は、博物館の展示室に置かれます。

新しい展示
ちょこっと紹介!!

新しい博物館内には、これまでの郷土館では実現できなかった展示手法を取り入れています。その一部をご紹介します。

郷土館で親しまれていた壁掛け電話。横にあるレバーを回して、もう1台の電話とお話した記憶がある方もいるかもしれません。この電話機は博物館に移設され、通話することができます。1台は1階にある電話室内にあり、2階に設置されている壁掛け電話と話しをすることができます。

展示を見学される方は、自由に電話を体験できる予定です。



兼平は明治30年10月に本籍を出身地である弘前市茂森町へ移しています。この年は英照皇太后の崩御に伴う恩赦により減刑措置を受け、満期放免となった受刑者が数多くいたため、集治監内の収容受刑者数が大幅に減少しました。また北海道への移民が積極的に進み始めたことから、入植の障害にもなりうる道内集治監の存続について、一つの岐路に立ちつつある時期でした。こうした状況を鑑み、故郷へ帰ることも視野に入れていたのかもしれませんが。しかしその2カ月後となる12月30日、病気のため亡くなりました。享年33歳でした。

昭和28年11月、当地で亡くなった多くの四人のための慰霊碑として、標茶霊園に『標茶集治監死亡者之碑』が釧路刑務所により建立されました。翌年から釧路刑務所他、町職員や更生保護関係者が集まり慰霊法要が行われるようになりましたが、その際には必ず兼平友太郎の墓碑も含め法要が行われました。これは現在でも続けられています。

兼平友太郎は、池田屋事件や禁門の変など幕末の大きな事件があった元治元年（1864年）の4月25日に弘前市茂森町に生まれました。幼少期については不明ですが、明治20年23歳の時に根室町（現根室市）へ戸籍を移転しています。そして2年後、明治22年5月より釧路集治監に傭員として採用され、会計課に勤務しました。明治26年に北海道集治監書記となっています。集治監の官職の中でも書記は上級職員であり、有能な官吏だったのでしょう。



標茶霊園にある
兼平友太郎の墓碑

【釧路集治監の記録シリーズ】(1) 墓碑『兼平友太郎』にまとめられています。その後も三栖氏による調査が続けられ、新たに判明した内容についても、釧路集治監シリーズの中で触れられています。三栖氏による調査結果の中で得られた、兼平の履歴について簡単にご紹介します。